ゆりかご

森野　水琴

ある晴れた日の昼下り、彼は庭に据えられたハンモックでくつろいでいる。
軒下にはツバメの巣が見える。
母鳥が卵を抱いているらしい。天敵から守ろうとする姿に心を打たれる。
彼が母の胎内にいた頃も、このようであったのかもしれない。
自分の鼓動を聞きながら、母の鼓動を思い出そうとしたが、思い出せなかった。
紐を引くと、ハンモックが揺れるようになっている。
何度か揺らしながら彼はまどろんでいく。

ツバメが巣立っていき、いつの間にか梅雨になった。
ときおり梅雨の中休みになり、彼はハンモックでくつろぐ。
読書すれば、揺り椅子ならぬ、ゆりかごの読書。
もうすぐ夏。日焼けに気を付けねばと思いながらまどろむ。

今年の夏は暑すぎた。彼は庭にパラソルも備えて、何とかハンモックでくつろいでいる。
薄着で過ごせるのは有難いが、汗がにじむ。
蝉しぐれを聞きながら、ゆりかごの読書を楽しんでいたら、いつしか虫の音に変わり、読書の秋になった。
「少年老いやすく学なりがたし」とつぶやきながら秋を歓迎している。

冬になり、年が明けて、彼は屋内暖房の部屋で、揺り椅子に腰かけくつろいでいる。
たたまれたハンモックは春を待つ。
次はツバメの再来が見られるだろうか。
椅子を揺らしながら、彼はまどろんでいく。